

前漢 前202〜後8 184 25 159 1000
 後漢 25〜220年 386年
 魏 220〜265 511
 蜀 265〜271 260
 呉 265〜280 280
 西晋 265〜316 316
 東晋 317〜420 420
 宋 420〜479 479
 南朝 420〜589 589
 北朝 420〜589 589
 隋 581〜618 618
 唐 618〜907 907
 五代 907〜960 960
 宋 960〜1127 1127
 元 1260〜1368 1368
 明 1368〜1644 1644
 清 1644〜1911 1911

第十三章 三国鼎立

洛陽炎上

先ず、前漢（前202〜後8）から

後漢（8〜184）を経て、魏（220〜265）

蜀（265〜271）呉（265〜280）

の歴史を、かいつまんで見ておこう。

漢の高祖（劉邦）が三尺の剣をひっさげ

て漢の天下をひらき、長安に都を定めたのは

前二〇二年のことであった。

その時から数えて約四〇〇年後、一度中絶し

た漢王朝を光武帝が二五年に再興し、洛陽に

都を置いてからは二〇〇年たらずに磐石のよ

うにゆるぎなくみえた漢帝国も、ようやく衰

えをみせてきた。世界の歴史（4）中央公

論社（一頁参照）

もはや名のみとなつて、まつた皇帝は、

皇后の生家である外戚と、後宮の宦官と

によつてあやつられる傀儡と化していった。

そんなとき、黄色い巾を頭にまきつけた農

こ

世界の歴史
(4) 57
元 1121

1001

P

世界の歴史 (4) 2
請う云々 226
暴虐云々 2012 1134
1134 世界の歴史 (4) 2
184年

東洋史 220
百科 10-12

民軍がとつせん中国全土いたるところか
ら蜂起して村役人を殺し県知事を追っは
らう。県城を占領した。後国大乱(西七二八頃)の終結とほぼ同時期
• それは、一八四年のことであった。いわゆ
る黄巾の乱が勃発したのだ。
後漢は、最後の力をふりしぼってこれを鎮
圧したが、その余波は中国全域に波
及していった。こうした時、外戚に請われた残忍極まりな
い殺し屋將軍董卓が、宦官を弾圧してクーデ
ターを行う為、洛陽へ入京し、あわれな後
漢最後の天子献帝を擁立した。
だが、あまりにも非道な董卓の暴虐ぶりを
諸将たちは坐視できなかつた。
東方の諸軍閥は、連合軍を組織し、洛陽
めかけて進軍を開始した。
さすがの董卓も、この勢いにたまりかね、
西方・長安へ撤退する。やむなきにいたっ
た。
それにしても、何ということだろう――

1272

こ

こ

④ 1138^p, 1139^p - 2/2

4/138

後漢書[卷]1-150⁷

343 小株
布令 343
命令 法令 告知

うなが 小林
督 688^p

74
117780

東海史研 243? 70 三口史 1-210 ~ 判断

命令法命令知了也。

次頁
から

このとき董卓は、李肅を督^{とく}して、強^{きやう}権^{けん}を布^ふ令^{れい}させた。〔三国志〕(一)吉川英治全集(26)講談社、二一〇頁(負参照)

今朝、寅^{とら}の刻^{くわく}を限^{かぎ}って、宮門^{きやうもん}・離宮^{りきゆう}・城^{じやう}楼^{ろう}・城門^{じやうもん}・諸官衙^{しよくわんが}・全市街^{せんにしがい}の一切^{いっさい}に互^{たがひ}って火^ひを放^{はな}ち、全洛陽^{ぜんらくやう}を火葬^{かそう}に附^つすであうう

という命令^{れいめい}であつた。

●とき^{とき}に 初平元年(一九〇)三月己酉^{しごう}のこ

とであつたという。(後漢書^{こうわんしよ}、^{あき268}献帝紀^{けんていき}第九

范曄^{はんえつ}、後漢書九)「中国の帝都^{ちゆうごく}」村田治郎、綜芸舎、五八頁参照)

やかて、寅^{とら}の刻^{くわく}となつた。

まず、宮門^{きやうもん}から火^ひが揚^あがった。

そして、洛陽^{らくやう}中のあちこちに放^{はな}たれた火^ひは、

勢^{いきさつ}いで燃^もえ広^{ひろ}がっていった。

三國史記 卷之六 魏志
210P

大カン71575[?]
小材
688[?]

癸卯
癸令
癸令 癸令 癸令
癸令 癸令 癸令
343^p

1003 P 1002 1138 1160
 花ひらく長安 2318 P 57.11.10
 三国支物語 22
 三国支物語 21
 三国支物語 20
 三国支物語 19
 三国支物語 18
 三国支物語 17
 三国支物語 16
 三国支物語 15
 三国支物語 14
 三国支物語 13
 三国支物語 12
 三国支物語 11
 三国支物語 10
 三国支物語 9
 三国支物語 8
 三国支物語 7
 三国支物語 6
 三国支物語 5
 三国支物語 4
 三国支物語 3
 三国支物語 2
 三国支物語 1

前頁

紫金殿の勾欄、瑠璃楼の瓦、
 碧、鴛鴦池の珠の橋、そのほか後宮の院舎、
 親王寮、議政廟の宏大な建築物など、
 る伝統の形見が、炎々たる熱風のうちに
 てうれた。
 各陽の都は、七日七夜も焼けつづけ
 たが、なおい大地は冷めなかつたという。
 洛陽の都が、鶏犬の鳴き声もきか
 ぬ荒涼たる野となつてしまった。
 と書きしるしている。「世界の歴史」(4) 中央
 公論社、五頁参照)

長安に達した董卓は、ここでも大掠奪を行
 なった。
 あきれた部下によつて董卓は、
 この知らせを聞いた市民が、
 へおどりと出し、あぶらぎつて肥えた董卓の死
 体の脛に火をつけたところ、
 かと燃えつづけた、という。
 その喜びもつかのま、董卓の死後、
 部下の

六朝 1174 東漢 1174 魏 1174 蜀 1174 吳 1174 宋 1174 齊 1174 梁 1174 陳 1174
 世界の歴史 1174 世界の歴史 1174 世界の歴史 1174 世界の歴史 1174 世界の歴史 1174
 世界の歴史 1174 世界の歴史 1174 世界の歴史 1174 世界の歴史 1174 世界の歴史 1174

あいだに同土討ちがはしまった。
 長安の城中は戦火に焼かれ、四〇〇年の漢王朝の台下に蓄積された富や文化財等の全てが壊滅し、累累たる瓦礫の山のみ残った。
 大小の軍閥の淘汰がはたるところで、激烈な攻防は多数の殺戮、流浪と生産破壊をもたらした。
 このように血に飢えた虎達が互いに喰みあい殺しあつて各地を荒しまわつた結果、ついに三虎が勝ち残り、睨み合う情勢となった。
 一は長安から逃げてきた後漢の皇帝献帝を洛陽に近い許昌（いまの许昌）で迎え、この天子を推戴して群雄に号令し、その後、都を洛陽に置き、北シナ一帯を支配することになる。
 曹操の魏（二二〇―二六五）。
 二は揚子江下流域を中心とする南シナ一帯を領有し、建業（今の南京）に都して、いわゆる六朝の端をひらく。孫権の呉（二二二―二八〇）。

①/002

「小町」134^P
孝昭天皇と敏達天皇
世界の歴史(4) 13^P

今の湖北省・湖南省

三〇大物語 89 地図

2163 命運 = 運命

1006 下 165

1004 13~14 坂

せい 1229 覇 多かて 力をいさると 世界の 史(4) 唐 13 49

崖が露呈してゐる赤壁 武漢の北流にいた
 孫権 劉備連合軍は揚子江の中流に
 孫権は、孫権と連係
 辛うじて虎口を脱した劉備は、
 曹操軍を撃退する策を練り、
 孫権と連係
 逃れる方の劉備も、もちろん必死であつた。
 の命運をかける真剣な気合いがあり、
 強行軍で劉備を追つた曹操には、天下統一
 をたじろがせたと。曹操の追ひすが大兵
 士関羽と張飛とがいて、三国志で有名な勇
 騎五千を率いて、昼夜兼行二〇〇
 して劉備を追つた。1446
 奥上の華北の支配者となつていた曹操は、精
 漢の歌帝を擁して号令をくだし、ほとん
 五の八年、北方の群雄を制覇し、曹操は
 三國鼎立の形成を決定づけたのは、中国史上あま
 りにも有名な赤壁の戦い(二〇八)である。

1. ようとして失敗
 2. づけたのは

三〇大物語 89 地図

赤壁 長江の南岸

かうこうほかん
長江北岸の

355 P
7649

対岸へと漕ぎ

曹操の大軍と相会した

第 235 回 参照

呉の將軍周瑜は、十艘の船に枯水柴をつん

で油をそそぎ、その周囲を幕でつつんだ。

降伏をよそおつた船は、東北流する揚子江を

渡り、曹操の大艦船部隊の方へ近寄っていった。

激しい東南風の風上から近づいた小舟は、

いっせいに火を發した。その火は、たちまち

大船の群れに燃え移った。

自由を失った大船団が水へ向かって攻撃する訓練

を十分にうんだ周瑜の氷軍。曹操の軍兵達は

なすこ
ろを知らす
狼狽するは
かりてあ
った

[illegible]

女
の
く
眼
上
の
サ
ハ
ん
ひ
及
妻
十
三
車
合
里
〇

に
よ
一
で
上
の
曹
按
の
障
堂
へ
も
燈
え
広
か
た

て
キ
ダ
リ
ニ
ン
ラ
ン
コ
キ
ハ
ン
ニ
ツ
ク
ハ
ン

そうぞう
商の大
そつぞう
桑の
大
目
は
反
非
威
製
上
存
ハ
下
下
作
の
雪

曹の太軍に芝蔴を煮たり、さすかの曹

せん
 は
 曹
 桑
 の
 下
 帝
 血
 を
 系
 つ
 又
 川
 三
 後
 其

上
 帝
 の
 建
 安
 廿
 三
 年
 の
 三
 の
 八
 の
 二
 の
 五
 の
 三

世界の歴史 (1) 家本善隆 心平史
 論 三
 三頁

工もあれぐ曹桑は南下策に失敗して華北を占領

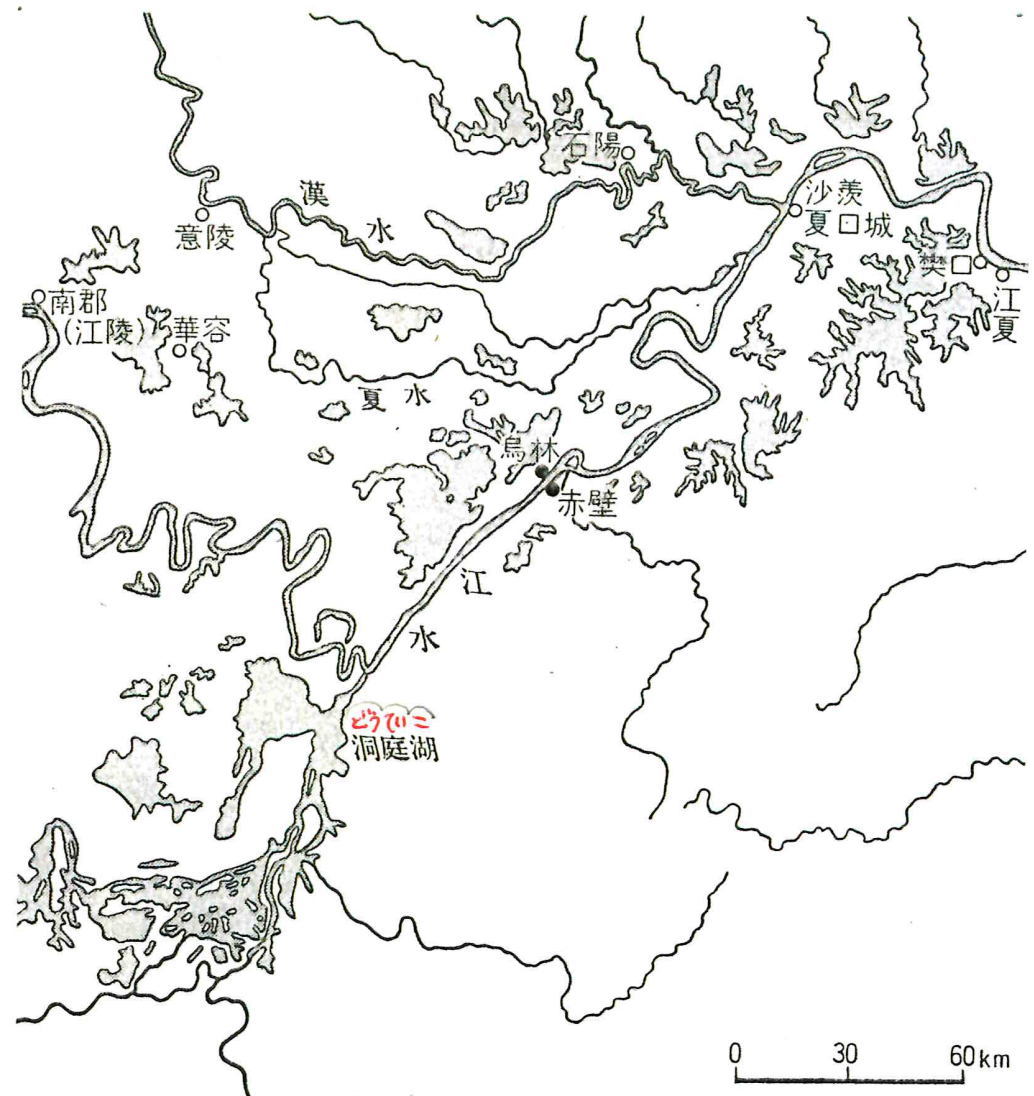
系そん 籀しう 工こう 南なん 友ゆう 配はい 是ぜ 確かく 東とう 上じやう 乃の 望わう 蒲ふ 前ぜん

門を得て益州侵入の素地を築き、天下三分の

現在の四川省

1007^P-2/2

・ 右頁の右上(1/4頁)に、
はみ出して大きく載せて
下さい。



1324 1424 第235図 赤壁付近略図
『三国志物語』寺尾善雄、光風社出版、89頁参照。

東洋史 405
4277 OK

東洋史 405' 神護
⑤ 1215-3/3
花ひく 267

⑤ 1141P
⑤ 1215P
1008P-1/2
1267P

ミヨフイム
⑤ 1139P-3/2
⑤ 1141P

王莽とついで2回目の神護 ⑤ 1215-3/3
⑤ 1215P ⑤ 1141P
⑤ 1139P-3/2

ようこが
擁護下に

形勢がほぼ定まった。東洋史 405' 神護 ⑤ 1215-3/3
こうして天下の政治は三分され、軍権も三
者にぎられたが、それでも漢の長期にわた
る歴史的な重みに支えられ、後漢の献帝は
曹操の擁護下に皇帝としての地位を維持して
いた。曹操は建安二十五年(二二〇)正月に
そのとき、曹操の長子曹丕(一八七-二二六)
が実権を掌握するところとなり、
に取って代わって魏が天下を治めるための態
勢を著々と整え、群臣の再三の勸
祥瑞や予言があいつぎ、十月、
王莽についで第二回目の神護革命である
と、ただ、因みに述べると、王莽が試みた神護は不完
全なものであったとされる。魏の曹丕が後漢の
帝の神位を受けたのを最初として、宋の
この以降、晋・南北朝・隋・唐を経て宋の

東洋史 405' 神護 ⑤ 1215-3/3

版119 220年

座視 883
座は見ていただけ
座に座に着く

1,008²/₂

3/21 114P, 1215P-2/2
花ひろく長安 26
ニニニ 版119

後周 東洋史 256 五代
東洋史 405 研
東洋史 403 云134

太祖が後周の恭帝から禪譲された陳橋の変(九六〇)
へいたるまで、十数回にわたり行なわれてゆ
く。トになる。一「世界の歴史」中央公論社
一七頁。「花ひろく長安」布目潮風・山口修
集英社、二六頁。「東洋史辞典」東京創元社
へ禪譲へ曹操へ曹丕へ五代へ参照
文帝(曹丕)は、年号を黄初と定めた。
その年(黄初元年(二二〇))の魏国の都は、
鄴から洛陽へと遷された。一「花ひろく長安」布目潮風
集英社、二六頁参照
禪譲によって帝位に即いた
劉帝の頃
2322
1376
511
魏の曹丕が漢帝を廃して皇帝になった
曹丕が帝位についたとすると、他の
人として、座視しているわけにはいかな
は、翌二二一年、みづから漢帝と称した
また、孫権は、その翌年の二二二年に自ら

東洋史 256 五代
東洋史 405 研
東洋史 403 云134
東洋史 405 研
東洋史 405 研
東洋史 405 研

大正 三国時代
220~280 年の統一まで

かくちく 角 386°
角は 震う。通は 基因。 かくち 命脈 2166°

吳王^{すうおう}を^を称し、七年後に^{しちねんごに}吳帝^{ごてい}となつた。
 このようにして、後漢^{ごかん}の細々と^{ほそぼそ}命脈^{めいみやく}は
 絶えてまい、洛陽^{らくやう}の魏^ぎ、成都^{せんと}の漢^{かん}、南京^{なんきん}の
 三つの皇帝が鼎立するところとなつた。
 そして唯一であるべき天下の皇帝権をめぐ
 ったの角逐戦^{かくつせん}が、長らく続いていった。
 (世界
 の歴史) (4) 塚本善隆「中央公論社」一七〇一八頁参照
 一か、この三国のうちで、最も強力な国
 と目されたのは魏国であつた。
 天下の中心である中国北部を支配し、漢
 民族の伝統の郷土にその勢力をはつたという
 ことが、蜀漢や吳よりも、人心を得る上では
 るかに有利な条件となつた。それからである。
 もっともこの北中国の広大な領域は、長
 年にわたる戦乱により、すっかり荒廃してい
 た。
 ことに、洛陽の都は、殺し屋将軍董卓によ
 つて焼き払われ、^{まひ}焼土と化していた
 昔日のあの華やかな洛陽の面影はなく、

H10.3.6(金) H30(2018)2.10(土)〜2/13(4回)
 H12.3.7(土) 正
 H18.9.19(水)
 令和元(2019)5.17(金)〜5.18(3回)
 令和元12.18(木)〜12.24(4回)

12/21-12/20
 12/20

目がたつとつれ、時を経るに
 見る間に
 またくとや(1030)
 たちまち ころに(1008)
 起のうせに 改行

57.11.12 久しく長らくの間
 復旧 1948P
 中国華北地区南部の省

と想像される。(後述)

米

庶民の家々さえも、全てが新築されたばかり
 宮城内の数の殿舎や城門
 復興した年、つ
 まり曹魏の景初三年(二三九)頃には、洛陽の
 都全体が沸き返るばかりに華々しく復興した
 洛陽の都を中心とする奢侈風流の香りが
 華北の地における復旧は、驚くばかりにめざ
 まりかかった。魏国の経済力は大いに充実し、
 豊かな繁栄がもたらされるまでになった。
 洛陽の都を中心とする奢侈風流の香りが
 華北の地における復旧は、驚くばかりにめざ
 まりかかった。魏国の経済力は大いに充実し、
 豊かな繁栄がもたらされるまでになった。

この焼土の上に、新たに「国都」としての経
 営が始められた。
 ・とはいえ長らくの間生産と文化の中心地であつた
 華北の地における復旧は、驚くばかりにめざ
 まりかかった。魏国の経済力は大いに充実し、
 豊かな繁栄がもたらされるまでになった。
 洛陽の都を中心とする奢侈風流の香りが
 華北の地における復旧は、驚くばかりにめざ
 まりかかった。魏国の経済力は大いに充実し、
 豊かな繁栄がもたらされるまでになった。

2376P

古代中216P
 城壁とある
 云・但し
 1084P
 城壁とある

同文
 1141P